歴史叙述と「教科書問題」――人は何故歴史を振り返るのか

桂島宣弘（文学部教授）

司会　本日は10月シリーズ特集「いま、教育の現場で」の第四回目、講師は文学部教授桂島宣弘先生です。「歴史叙述と『教科書問題』――人は何故歴史を振り返るのか」をテーマにお話していただきます。桂島先生は本学文学部教授で、1995年から本学に着任されました。立命館大学文学部日本史のご出身です。専門は日本近世思想史です。主な著書に『幕末民衆思想の研究』（1992年）、『思想史の十九世紀』（1999年）、論文に「アジア主義、何処から何処へ」（『岩波講座現代思想14巻』）、「宣長の『外部』」（『思想』932号）等がございます。それではよろしくお願いします。

桂島　本日は「歴史叙述と『教科書問題』」をテーマにお話させていただきます。副題に「人は何故歴史を振り返るのか」という、やや歴史哲学的な題をつけさせていただきました。実は副題が本日の話では重要な意味を持っております。ご承知のように、今年、「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書が検定合格となり、その市販本が出版され、これをめぐって国内でさまざまな議論があり、さらに国外からもその内容が批判されるなど、いわゆる「教科書問題」が話題となりました。その経過については、皆様方はご存じの上で、ここにお集まりのことと思います。

この教科書をめぐる具体的な問題に関しては、のちほど触れさせていただきますが、皆様方も、さまざまな歴史に対する見方、日本の歴史に対する考え方から、この教科書に対するご意見をお持ちではないかと推察します。この場で、何が正しい歴史観なのか、教科書はかくあるべきだという議論をするのではなく、私は江戸時代の思想史が専門ですので、歴史思想という視点、「人は何故歴史を振り返るのか」という視点から、「教科書問題」について私見を述べさせていただきたいと考えている次第です。

「人は何故歴史を振り返るのか」。「人」と言いましても漠然とした言い方ですが、まず自分自身のことを考えますと、桂島という私がここにおります。同時に不可分のものとして男性としての私がいます。もちろん、ここには女性としての私もおられます。さらに大げさなものを背負っているわけではありませんが、桂島家の一員としての私がここにいます。実は、桂島というのは関西では大変変わった苗字です。宮城県の没落地主の家だったらしいのですが、祖父は戦後の農地改革を最後まで嘆いていたそうです。何やら「桂島家の歴史」という親戚が書いた原稿があるのですが、とても世に問えるような代物ではないので、私は密かに箱の中にしまっております。いずれにしても、家の歴史というものがあります。さらに私が育った場所があります。故郷と呼ぶべき市町村、都道府県があります。ここには、故郷に愛着を感じている方もたくさんおられると思いますが、戦後の歴史学で一番大きな成果が挙がったものの一つは、郷土史＝地方史だと思います。夥しい量の市町村史、都道府県史が出ていることはご存じだと思います。さらに私は日本国民としてここにいるわけです。この場の皆さん方も日本国籍を持っておられる方が多いと思いますが、それを略して日本人と言うわけです。私は日本人である。日本人である私を考えた場合、日本の歴史が存在しているのではないかと思うわけです。さらにもう一つ拡大して、日本の外に行った場合、世界というものがあります。さらに地球があります。地球と言うと、人間どころか生命すべての歴史が射程に入ります。地球は宇宙へ、太陽系・銀河系があるわけですが、ここまでくると宇宙の歴史ということになります。ビッグバンから始まって

宇宙が膨脹して云々という話になります。

「人は何故歴史を振り返るのか」ということですが、このように考えますと、さまざまな存在の統合体としての「人」として、私がいる。宇宙の中の私、地球、世界の中の私、日本の中の私、都道府県、市町村、故郷の中の私、家系の中の私、男、女というレベルでの私、そこで初めて私というものにたどり着くわけです。

なぜこのような話をしたかと申しますと、「人は何故歴史を振り返るのか」を考える場合、この分け方は重要な意味があると思うのです。現在、学校教育の場では、小学校から振り返っていただければわかるように、故郷の歴史＝市町村・都道府県、日本の歴史、世界の歴史が教えられているわけです。そういうものを、私のように江戸時代を専門とする立場から見た場合、実は江戸時代までは、「国の歴史」という形での歴史叙述の書物は一冊も存在していないことに気づかされます。このことは、意外に思われる方があると思います。『古事記』『日本書紀』に始まって、幕末に人気があった頼山陽の『日本外史』など、上に「日本」とつく本が沢山あるじゃないか。これは国の歴史の本じゃないのかという反論があると思います。しかしながら、『日本外史』は 200 年前、1801 年に完成した書物で、今年は『日本外史』成立 200 周年なのですが、この書物はどんなものか。ある程度年配の方はおわかりかと思いますが、源平から徳川までの武門の興亡を物語風に叙述してある書物です。その意味では『日本外史』は武家の興亡史という特色を持っております。もちろん日本列島上に存在した武家ですが、あくまで武家同士の興亡が軸になっている。つまり、武家という家の歴史が叙述された書物と言っていいのではないかと思います。

同様に、有名なもので『大日本史』があります。水戸光圀が編纂を開始し、完成は明治に入ってからですが、『大日本史』というのは中国の正史を強く意識し、紀伝体という書き方で、天皇ごとに何々伝と立てて書く。現在私たちが見慣れている歴史書とは色彩が随分違います。中国の正史はそういうものですが、天皇を一代ずつ叙述していくという形を取ります。南朝滅亡の後小松天皇まで神武天皇から一代ずつ立てて書いていく書物です。したがって、『大日本史』は、ある意味で天皇家の歴史と理解されます。

あるいは新井白石も史家として有名な人で、『読史余論』という書物があります。この歴史書には朱子学的な見方が入っています。新井白石のものは、中国の儒学者司馬光の『資治通鑑』、及び朱子の『通鑑綱目』を念頭に置きながら、武家と天皇家・公家の興亡を書いていく。これも武家公家興亡史であると言わざるをえない。また、北畠親房の『神皇正統記』は南北朝期に神代から後村上天皇までの皇位継承を軸に叙述したもの、慈円の『愚管抄』も公武協調の視点から公武の興亡を叙述したもの、さらに『古事記』『日本書紀』も戦前、津田左右吉という歴史学者が言う通り、天皇王権の正統性の由来を説いた歴史書であるということになります。

それぞれ並べていきますと、何々家の歴史とは言えても日本の歴史と称せられるものではない。この点をもう少しはっきりさせるために、福沢諭吉の言葉を引いておきたいと思います。福沢は明治時代を代表する有名な啓蒙思想家ですが、『文明論之概略』という書物の中で「日本には日本国の歴史はなくして日本政府の歴史あるのみ」と嘆いています。それでは福沢は「国の歴史」をどこで知ったか。実はヨーロッパの歴史書で知ったわけです。「ヨーロッパには国民や国家をきちんと書いた書物が存在しているのに、日本には政権交代史、せいぜい何々家の興亡を記した歴史書が存在するにすぎない」と嘆いているのです。

こうした状況を「国の一大欠点」と言っています。福沢が『文明論之概略』を著した明治七～八年段階で、基本的にはそれ以前において日本国の歴史と呼べる書物が一つもなかったということが浮かび上がってくるわけです。つまり、現在の私たちにとってあまりに常識になってしまった日本史＝日本国の歴史は、新しい歴史の書き方、新しい歴史書であるということです。より正確に言うなら「近代以降に成立した歴史叙述の方法である」ということを、まず始めにはっきりさせておきたいと思います。

それでは、前近代の歴史書はどんなものだったか。どういう形で歴史が叙述されていたのか。それを近代以降の歴史叙述と比較しながら考えてみたいと思います。江戸時代の歴史書、『大日本史』『読史余論』『日本外史』などは大変著名で、高校の教科書にも載っていますが、これは儒学的な見地＝朱子学的な見地からなる歴史書と言えます。これには大きく三つの特色があると思います。このことは、「つくる会」の教科書を見る際にも重要なことだと思いますので、やや詳しく見ておきましょう。

一つは「治乱興亡史観」で、歴史は治まったり、乱れたりが次々と繰り返されるという考え方です。それが繰り返されるという意味では、「循環史観」と言ってもいいかもしれません。私たちがすでに失ってしまった歴史に対するものの見方です。歴史は繰り返すと言いますが、現代の私たちはこれを比喩でしか用いません。ところが江戸時代の儒学者にとっては、これは比喩ではありません。歴史は繰り返されます。しかも国境を超えて繰り返されます。中国の歴史書がなぜ必死で読まれるのか。私たちが読むように、他国の歴史書として読むわけではない。繰り返されるがゆえに必ず参考になるだろうということです。つまり、中国の歴史書は中国の歴史書であると同時に普遍的な歴史書でした。儒者は中国の歴史書を下敷きにしながら書くわけです。これは『日本書紀』からすでに始まっています。江戸時代までずっとそういう形で歴史書は書かれてきた。新井白石も朱子の『通鑑綱目』を横に置きながら『読史余論』を書いたことは先にのべました。「循環史観」は国境をも超えていく歴史の見方だということに注意しておいてほしいと思います。

二つ目は、「鑑戒主義」です。歴史を鑑＝鏡とする考え方です。過去の過ちから学ぶ。過去の過ちをきっちり見て、治乱興亡の叙述を見ながら、なぜ乱れたのか、そこを反省する。同じことが繰り返されるわけですから、現在の我々以上に緊迫して書物を読んで学ぼうとする。本当の鑑＝鏡なのです。歴史を一生懸命、鑑＝鏡として、そこから戒めを引き出す。この考え方は、日本の有名な歴史書の中に一様に共通して出てきます。『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』などは古代・中世の有名な歴史書ですが、名前にもその考え方は出ています。まさに「古ヲ以テ鑑ト成シ、人ヲ以テ鑑ト成シ、以テ得失ヲ明カニスヘシ」というわけです。失敗もちゃんと見ようというわけです。

三つ目は「直書主義」です。朱子の言葉に「実ヲ以テ直書シテ、理自ラ現ル」というのがあります。「事実」を「直書」すれば、余計なことを書かなくても「理」は自ら現れる。したがって、正式の歴史書の「紀」は解釈とは別に記述される。「何月何日こういうことがあった」と淡々と記していって、そこに「自ら善悪が現れる」と言っているわけです。念のために申しますと、「事実」と解釈は不可分のものでありまして、現代の我々から見ると、かくいう儒学者・朱子学者の歴史書も解釈を離れてはありえません。「事実」を淡々と記して、そこに自ら「理」が現れると言いますが、なぜその「事実」を取り上げるのかということの中に、すでに一つの解釈が入っている。したがって、厳密には「直書主義」は彼ら

が言うほど解釈と無関係ではないわけであります。ただ少なくとも彼らの主観のレベルでは「直書」、記録に残っているものを淡々と断定型で記していけば、後は解釈しない。そうすれば「理は自ら現れる」。

以上、大きく言えば、儒学系の歴史書にはこの三つの特色があろうかと思います。江戸時代は、儒学系の歴史書が盛んだったわけですが、それを通覧すると、直ちに気づかされるのが、この三つの特色であります。「治乱興亡史観・循環史観」「鑑戒主義」「直書主義」ということです。こういう歴史観は当然のことながら、近代以降、多くは見捨てられていくことになります。

実は、「教科書問題」について考える時、このような儒学的な歴史観を置きながら、色々なことを考えさせられたことがあったわけですが、この点はのちにまたのべます。

ところで、ここで「史」という漢字にも注目しておきたいと思います。立命館大学名誉教授の白川静先生の有名な『字統』を引きますと、それぞれの漢字の成り立ちが詳細に書いてあります。「史」とは何か。「史」が「中」という漢字と、「手」を意味する「又＝ユウ」という漢字から成っていることは、ほぼ全ての漢和辞典に書いてありますが、「中」については諸説があるようです。白川先生は「中」について、祈祷の器である「□＝サイ」を木に著けた形としています。これを手に持ち、神に捧げて祭る形式の祭儀が「史」の原義であるとしています。やがて、祝詞というものを保存し、その伝統を保持し、記録するという職掌を通じて、さまざまな王権の祭儀などの記録を管理する、保持する人が「史」とされていったのではないかとのべています。

「史」という漢字を調べて面白かったのは、後漢に成立した『説文解字』という中国最古の漢字の辞書がある。これではどう言っているか。「中」を「中正」と解して、「中正を記録する人」。この説は、白川先生は間違っているとしていますが、考えさせられるところがありました。何を「中正」とするのかは難しいのですが、少なくとも「中正」「中庸」を記録する。偏らないことを厳格に記録する。儒者はそのように言っているわけですね。今日、何が「中正」なのかということは大問題ですが、儒者は基礎に『経書』がありますから、それを基準に見れば「中正」はわかる。現代の我々にはそれがない。ない我々が「中正」を記録するのは甚だ難しいところがあります。『説文解字』は「史」をそのように解している。「中正を記録する」。「歴史教科書」を考える意味では、なかなか含蓄深い言葉ではないでしょうか。

こういう語義を持った「史」、「史」についての考え方が、日本の前近代までの歴史叙述や歴史書に大きな影響を持っていた。江戸時代の歴史書を書いた人たちのものを読みますと、彼らは皆、我々から見れば偏っていますが、少なくとも彼らの中ではできるだけ「中正」に書こうという努力が伺える。林羅山・林鵞峰の『本朝通鑑』なども一生懸命書かれています。『大日本史』の編纂官も議論をしています。面白い議論を紹介しますと、『大日本史』は、徳川光圀から始まって近世を通じて書き継がれ、完成は明治になったということになりますが、よく知られていますように、前期と後期に分けられます。後期の方は後期水戸学につながっていくもので、大体、立原翠軒のあたりから言う。有名な徳川斉昭＝烈公や藤田幽谷・東湖親子、会沢安など、後に尊王攘夷運動につながってくる水戸学・天保学の母体になっていくのが後期ですが、前期はそうではありません。前期の『大日本史』は「中正」を期すためにすべての天皇の「得失」を書いていくわけです。天皇の「失政」

も書いていく。この天皇はこういう悪いことをした、と。ところが後期水戸学は、これは天皇に対して不謹慎であるとして削除していく。このあたりに後期水戸学が近代以降の歴史の見方にグッと近づいていく流れを感じますが、天皇の「失政」も全部書いていくというのは「中正」を期し、鑑とするためには正確に書かなければならないという見方が根底にある。新井白石も、『読史余論』の中で「後醍醐、中興の政正しからず」「後醍醐、不徳にておはし」「南朝既に亡び」と言っている。そして、ここで王朝が交代し「天下はまったく武家の代とはなりたる」と言っています。新井白石は、「王朝交代」にはそんなに違和感がない。「天命が去れば、易姓革命が起こって当然である」というのは儒者の立場でありますから、そのように見ております。江戸時代までは、私たちが思う以上に、比較的辛辣なこと、「後醍醐、不徳にておはし」ということを書く。

このようにのべておりますのは、別に江戸時代がよかったということを申すつもりではなく、近代以降の歴史書、歴史叙述のあり方を見る時、江戸時代のものを置いてみることは意味があると思うのです。我々も近現代の中に生きていますから、近現代の見方があたりまえになってしまっている、あたりまえになってしまっているものを相対的にとらえていくには、江戸時代のものを見ることは有効だと思っています。こういうものを横に置きますと、近代以降に著された歴史書は前近代までと明らかに異質なものであると言わざるをえない。

近代以降の歴史叙述の一つの特質は「一国史」、国民の歴史を叙述しようとすることです。福沢が「日本には日本国の歴史はない」と言い「早くつくらないといけない」と考えたことを、明治政府は大急ぎで始めていく。明治期、概ね二つくらいのところでその作業が行われているように思います。一つは大学＝東京帝国大学です。もう一つは在野です。在野の方が、より庶民的なレベルまで目が届いていた。東京帝国大学の人たちは儒教の影響を受けている部分がありますので、どうしても王朝興亡史観的な見方から自由になれない。それに対して、山路愛山、徳富蘇峰、竹越与三郎などは庶民を叙述しようとする。戦後の歴史叙述は愛山とか蘇峰、竹越の流れを意識した部分もあると思います。戦前の教科書は国民の歴史書を書こうとしたのですが、王朝興亡史観的なものにならざるをえなかった。帝大史学会が編纂した『校本国史眼』が近代以降の最古の日本通史と言ってよいのではないかと思いますが、それは過渡的な性格を持っていて、天皇家と武家を中心に記述しているのではないかと思います。庶民・国民がどういうふうな生活をしていたのかを叙述し始めるのは在野の方が早かったという印象があります。

ところで、こうした近代以降の歴史叙述と比較すると、前近代までの歴史書は実は共通性の叙述が強く意識されていたことに気づかされます。中国や東アジアなど全体が同じ歴史で動いていく。そういう見方が強くあります。儒教という立場に立って見るのであれば、自らそうなります。「道理」「正理」は前近代の歴史書、儒教系の歴史書にとってのキーワードです。『愚管抄』などもそうですが、これは仏教系と見るか、儒教的と見るか、議論があるのですが、『愚管抄』のキーワードも「道理」です。これはいやしくも日本列島、日本の王権だけを支配しているものではない。彼らにとっては少なくも世界全体、当時の世界は中国を中心とする世界にならざるをえませんが、我々から見たら狭い世界ですが、当時の学者からすれば、日本だけではない、世界の「道理」です。「道理」が歴史というものを貫いているという見方で一本筋がポーンと通っているわけです。したがって、歴史叙述に

国境がない。同一の「道理」が貫かれていく。日本のことを書いているのに、いきなり中国の話が書いてあったりすることがよくある。日本の事件の話を書いている時に「中国もこれに相当する」と平気で書いてしまえる。それがなぜ可能なのか。「道理」ということが貫いているという見方がはっきりしているからだと思うわけです。

そういうことを横に置いて、近代以降の歴史叙述を見ますと、あまりにはっきりしていることは日本の「固有性」に重点が置かれていることです。明治時代の学者がヨーロッパに留学して帰ってきてのべていることですが、明治時代の学者、たとえば井上哲次郎とかがドイツに留学して歴史の書き方を学んでくる。彼らは驚いて帰ってくる。何に驚いたか。発想の逆転があった。つまり「我が国にしかないものを書かなければならない。そうしないと自国史にならない」。あっちにもこっちにもあったのでは、我が国の歴史にならないわけです。我が国固有の文化、我が国固有の特色、こういうものを書かないと、自分たちの歴史にならないということを明治時代の学者たちはヨーロッパに行って感じたわけです。我々は、あまりにもそういうものを読まされて慣れていまして、我々の方がそういうことに鈍感なんですね。「我が国固有」という言い方は、今ではあたりまえの言い方です。あまり違和感なく聞いてしまう。「日本文化の特色」「日本の歴史の大きな特色である」「日本的美である」ということに慣れっこになっている。ところが明治時代の学者たちはびっくりして帰ってきた。逆転するわけです。何とか我が国固有のものを発見しなければならない。

もう一つ例を挙げると、岡倉天心という人が日本の美を「発見」したと言われますが、私は、彼はヨーロッパ美術を介在しないと、日本の美は見えてこなかったと思います。「日本の固有の美」をフェノロサが言う。そのことによって「なるほどこういうものを固有の美というのか」と日本の美は「発見」される。ちなみに美術書、美術史は江戸時代までたくさん存在しているわけではありませんが、パラパラ見ていますと、申すまでもありませんが、禅とか仏教との関係で論じられているものが多い。江戸時代後期になりますと、西洋との比較の見方が出てきますが、明治期、東アジアの中での共通する美が、日本固有の美にガラッと変わっていく。これも近代と前近代の歴史を見る場合、押さえておかなければならない点だと思います。

さて、「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書は、きわめて問題が多い教科書だと思っていますが、誤解のないように、あえて言えば、この教科書だけが問題ではないという視点も必要であるということを申し上げたい。近代以降の歴史書はどうしても自国中心史観という傾向を持っている。それは自国の固有文化、自国の特質を記述する。これは前近代にはない、近代特有の歴史の記述方法であり、しかも日本だけではないということに注意する必要があります。ドイツの歴史の書き方、フランスの歴史の書き方、特色はそれぞれ違いますが、固有の歴史の書き方が一つのモデルになるわけです。しかもその際、重要になるのは、今回の教科書でもはっきりしていますが、古代に関わる記述です。近代の歴史叙述の大きな特色は、自国の固有の歴史を記述することなわけですが、一番大事なのは古代史だった。それはなぜなのかと、私はただ本居宣長の影響なのかなと漠然と思っていたのです。もちろん本居宣長の影響もあります。本居宣長の影響は明治の国語学、国文学、国史学には見られます。しかしながら、どうも最近、これは日本だけの現象ではなさそうだと気がつきました。固有の文化、固有の歴史、固有の特質を記述するには、古代をきちんと定めてやらないと書きにくいわけです。つまり「始原」をきちんと書く。何事もそう

ですが、「始原」にきちんとした点を置かないと、現在まで線が引けないわけです。日本の歴史を書こうと思ったら、「始原」をきちんと書いておかないと、具体的には日本人種の起源、日本語の起源、日本列島の「始原」などを、最初にきちんと書いておかないと、現在までつながってこない。したがって古代は明治の歴史叙述にとって重要な役割を持っていた。しばしば今回の「つくる会」の教科書を批判する学者も、「皇国史観と似ている」という言い方をします。私はこの教科書は皇国史観の復活とは違う、紛れもない現代の教科書であると思っていますが、このような明治の歴史叙述ときわめて似た面があるのは事実だと思います。つまり、戦前の歴史書は古代史の記述の分量が多い。中・近世は少ない。最近の有名な網野善彦という中世史家も言っていることですが、「戦前までは中世は暗黒であった」と。彼は『無縁・公界・楽』によって「自由な」中世を「暗黒」から救い出したわけです。もっとも、近世は未だに暗黒なんですけどね。ともかく、網野氏は中世史を明るく救い出した。その網野氏が言うには、戦前までは中世史は暗かった。古代史に光が当てられ、次に近代以降の雄飛する大日本帝国につなげる叙述になっている、と。

こういうことがらは戦前の自国史を叙述していくときのある一つの必然的な作業です。なぜこのことを思ったかというと、ヨーロッパの歴史学でも、十八～十九世紀のことですが、ギリシャ、ローマをどう叙述するかが重要な問題になる。そこからルネサンスも含めて問題になってくる。古典時代に原点を置きながら自分たちの国民史を書いていく。したがって、日本の歴史の書き方も、明治のあたりでやっていたことは案外そういうことかなと今思っています。もちろん、そうしたことの上で、かなりインパクトを持ったのは本居宣長だろうと思います。日本語とか日本人とか「何を持って日本の固有性とするのか」という議論を、かなり声高に始めたのは本居宣長以降の国学の影響だと思います。

私たちは自分たちの国の歴史、自分たちの固有の特色、歴史書に、近代以降慣らされ、それを自明のものとして歩んできたところがあると思います。実は私は今年から韓国の済州島（チェジュド）の済州大学校の先生方と一緒に、小泉首相が金大中大統領と合意をする以前から、共通の教科書づくりをやろう、互いの教科書を読もう、という作業を始めました。まだ準備の段階ですが、互いの教科書を見ていて面白いのは、目次が全然違うわけです。それぞれの自国史は自国民用につくられている。他の国民に読んでもらうことは想定されていない。ですから読んでもほとんどわからない。「こんなの、うちの国では小学生でも知ってます」「知りません」ということになる。逆もそうなのです。共通の項目が立たない。自国史はそういうところがあるのだとあらめて感じます。それほど共通の部分が少ない。解釈以前の問題で、そもそもどういう事件を取り上げるかが違う。日本史の言い方での元寇とか豊臣秀吉の朝鮮侵略、そして近代以降の歴史で、やっと共通の事件が登場してくる。しかしいかに重ならないものが多いかということに驚きました。あと三年くらいしたら『日韓歴史研究者による近世・近代史』という本を出そうと計画していますが、本そのものより、サブとしてお互いの議論を出版しようかと思っています。そちらの方が価値があるのかもしれない。共通の事件について、解釈をめぐって食い違いがあるのは当然としても、どういう事件を取り上げるかということから議論は始まると思うのです。そうしたことを全部さらけ出したものを副読本で出してみようかという話をしています。そちらの方が公刊する意味があるのではないかと思います。『日韓歴史研究者による近世・近代史』の方は、現行の教科書検定では落とされるでしょうし。せいぜい参考書として買って

くれる人がいる程度だと思います。それより議論の経過を出した方がいいと思います。

その際、意識しているのは「同時性」「共時性」です。つまり、共通性をもう一度発見できないか、と。今までの一国史はあまりにも固有性の議論ばかりで、我々は共通性に視点を据えてみようということが了解事項になっている。しかも我々は、もはや儒者にはなれない。今から「道理だ」「正理だ」と言ってもだめなのですが、とすれば現在、我々が少なくとも到達したとされる原理を議論することから始めるしかないわけです。それは互いの国民というものを尊重し、人権・平和について互いにきちんと確認することからしか始まらない。多分まだまだ議論が続きます。何を共通性とするのかということから興味深い議論になるでしょう。異質性は書いてある、どちらの教科書にも。「我が韓民族の特色はこうである」「日本人の歴史の固有性はこうである」。そうじゃなくて、共通性をもう一度探そう。共通の価値を互いに基礎にしながら、共通の価値の中で、歴史記述をめざそう。そういう意味で「我々は現代の儒者になろう」と。笑いながらね。ただし、儒者になることは、もう無理なのですけどね。ちなみに恥ずかしいことですが、私はハングルがほとんどできない。したがって、英語を中心に会話し、通じない時は「筆談」をする。それで思い当たったわけです。江戸時代の儒者も「筆談」で会話している。江戸時代の儒者ほど僕は漢文がうまくないので問題があるのですが。互いに現代の儒者になってやっていこうじゃないかという話をしている次第です。

今の話を、今日のテーマのベースに据えなければならないと思います。やっと本題のところにきました。「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書の特色は何か、について次に検討していきたいと思います。「新しい歴史教科書をつくる会」は 1997 年に結成されました。電気通信大学の西尾幹二氏、マンガ家の小林よしのり氏、さらに生長の家とか神道政治連盟という宗教団体、日本会議、日本青年協議会などで会を作り、それまでの歴史書は「自虐史観」である、そうではなく、もっと自国に誇りを持てる、自信を持てる教科書を作らなければならないと主張したわけです。西尾氏は今回の教科書のパイロット版とも言うべき『国民の歴史』を書き、さらに藤岡信勝氏との共著『国民の油断』も発刊し、これらは本屋さんに並んでおります。そして、ある種の運動になって、今日に至っています。

戦後、何度も教科書に関して問題にされた時期があり、人によっては今回は「戦後の第四次教科書問題である」と言う人がいます。第一次教科書問題は 1955 年に「うれうべき教科書の問題」というパンフレットを出して、日本民主党、保守合同直前の鳩山一郎さんの時代の日本民主党が教科書批判をしました。第二次教科書問題は、最近のことになりますが、「侵略」を「進出」に変えるということで外交問題になった 1982 年です。そして 1985 年、高等学校の教科書として『新編日本史』が、日本を守る国民会議によって原書房から出され、再び外交問題になったわけです。今回は第四次教科書問題と言われています。無論、それ以外に、家永三郎氏を中心とした教科書検定の是非をめぐる裁判がありました。

そういう中で、今回のものは、1990 年代以降、日本が政治的・経済的に自信をなくすという事態が背景にあるのだと見ております。これは私の見方でありますので、ご異議がある方もあると思います。しかし冷静に考えればこれしか考えられない。つまり背景にはこの間の日本経済の構造的な不況が関係していると思います。もう一つは、冷戦崩壊後の湾岸戦争で、現在の自衛隊の問題にもつながってきますが、資金面で支援をしても評価されない日本というのがあった。ちなみに西尾氏は当時、アメリカで日本が全く評価されてい

ないことに憤激して帰ってきている。よく知られた事実です。

そこへ1991年、いわゆる「従軍慰安婦」問題が出てきました。「従軍慰安婦」問題に関しては、三一新書からずいぶん前に千田夏光氏の書物が出ていました。決して新しいことではなかった。ところが、俄然、問題になってきたのは裁判と戦後補償をめぐる問題が起きてからです。さらに「従軍慰安婦」問題が教科書に記述されるようになった。個人的にはそれは当然だと思っていますが、教科書に載ったことが「つくる会」にとっては問題になります。1991年に「元従軍慰安婦」だった金学順（キムハクスン）さんが名乗りを上げ、日本政府に補償を求める訴訟が提起され、1993年には教科書が一斉に記述を始めた。ところが、これを記述することは日本の教科書としてふさわしくないと「つくる会」の方々は言うわけです。そういう意味では、まさしく現在の日本の状況、1990年代以降の日本の状況を背景にしながら、この教科書が書かれたと思います。内容は単純なものだと思っていますが、なぜこれほど大きな問題になったか。外交問題もあるわけですが、国内でも議論になったのは、こういう背景を背負っているからだと思います。

ところで、「つくる会」は、明確に違法性があると思われる動きも含めて派手な運動をやっております。違法性というのは、教科書をサンケイ新聞社と一体になって普及する。他の教科書ではありえないことです。独占禁止法が指定する「教科書業における不公正な取引方法」において、他の教科書を批判したり、特定の教科書を宣伝することは「不公正」と明記されています。したがって、これは明らかに違法行為です。また、ＫＳＤ汚職事件で辞職に追い込まれた小山孝雄前参議院議員が、「つくる会」に言われて国会で質問をしたことも、「ものつくり大学」問題と同様、違法行為であると思います。そういう派手な動きがあったわけですが、いかに不当なものであることが明白でも、この教科書が広がる根拠・背景は確かにあると思っています。まさしく現在の日本の状況が、「つくる会教科書」の社会的な背景をなしていることについて、きちんと見ておかないといけないと思います。これは戦後何度も繰り返されてきた教科書問題の単純な繰り返しでもなければ、ましてや皇国史観の復活とのみとらえるのは適切ではないと思います。1990年代以降の日本のさまざまな状況が重なりあいながら、その意味で、ある種の基盤、人々が何とも言えない不安を感じている基盤を背景にして登場していると思っています。

内容について。どういう教科書か。白表紙本、修正本、市販本を見て比較しました。どこがどう変わったか。どこが変わらなかったか、詳細に検討したのですが、かい摘んで特色だけ言います。まず、グラビアに美術作品があります。「ミケランジェロに匹敵する」という解説が市販本に出ています。最終的に残った言葉です。最初は「イタリアよりはるかに早い」とも書かれてありました。こういうものを見ていますと、個人的に滑稽なものを感じます。こんなこと言わなくてもいいのに、と。「欧米と対抗できる日本の美」という見方が露骨に出ています。ある意味では西尾幹二さん、西部邁さんの特色だと思いますが、彼らは欧米中心史観というものに強く影響を受けているのではないか。その意味では、明治以降の日本の近代的なものの見方、ヨーロッパと比較しながら叙述をしていく、欧米中心史観的な見方を色濃く持っていて、それが奇しくもドロッと出ているという印象を持ったのです。「世界の肖像画の中でも見事なもの」「世界美術の中でも類例のないもの」「世界にほこる日本の美」。こういうふうにしか書けないのかと。しかしながら、逆に言えば一国史というものは「そういうものなのかもしれない」ということがよく現れているのではな

いかと思いました。

原始・古代に関しては「縄文」をクローズアップしています。市販本では「縄文文化」となっていますが、白表紙本では「縄文文明」と書いてありました。「世界四大文明よりさらに古い」と言わんばかりで、滑稽なのですが、上高森遺跡について、「日本の旧石器の文化は五〇万年、六〇万年以上に遡る」と書いてあった。さすがに例の捏造問題が起こって書けなくなって、市販本では削除されていますが、最初の本では出ています。写真入りです。白表紙本が出た時点で改ざん問題は起こっているのです。改ざん問題が明かになった後に出されたわけです、白表紙本は。縄文文化の記述については、ネタ本は明らかになっていて、安田氏という考古学者の『世界の縄文文化』という本が『国民の歴史』に相当引用されていて、ほとんどこの教科書の記述にもなっていることは明らかだろうと言われています。私もそのように考えています。

縄文文化をなぜ絶賛するのか。分かりやすいのですが、弥生文化、大陸文化云々とくるところを極端に少なく記述する。これは一国史をどうやって書くかということをよく表している。独自の文化、文明をきちんと置いておかないといけない。それは縄文になる、と考えている。弥生文化は大陸から渡ってきた文化だと言われているので、そういうものをできるだけ少なくして、独自性・固有性を言うためには縄文をクローズアップせざるをえないのだろうと思っています。「森林と岩清水の文明」、後には「森林と岩清水の文化」と変わりましたが、最初は「文明」となっています。弥生文化については、のちに削除されましたが、「外から入ってきた少数の人々が伝えた新しい文化」というのが当初の書き方です。「少数」というのは削除されました、さすがに。大陸文化の話を書く時には『魏志倭人伝』に触れる必要があります。『魏志倭人伝』から邪馬台国の話を記述するのが普通の教科書で、日本の歴史はここの部分は中国の古代史書を参照するのは通例なんですね。今のところそれ以外に有力な史料がない。中国の古代史書によるしかないわけです。歴史家としてはそう思います。ところが「『魏志倭人伝』を書いた歴史家は日本列島に来ていない」とわざわざ書いている。何が言いたいのか。「いかに『魏志倭人伝』があてにならないか」という印象を与えたいのだろうと思いますが、それだけでなく、中国文化の影響、大陸文化の影響をいかに少なく書きたいかということがあるのだと思います。

また、「日本は中国から独立し、朝鮮半島諸国が日本に朝貢した」と平然と書いてあります。「中国から独立し」というのは、聖徳太子の「日出づる処の天子」云々という箇所がありますが、古代史の学問的な中では「東夷の小帝国論」というがあり、そういう意味では一定程度、大陸から離れた分だけ独立性を維持していたことは現在、認められていることではありますが、「中国から完全に独立した」ものとしてあったのではないことは、現在の古代史では通説だと思います。なおかつ「朝鮮半島諸国が日本に朝貢した」という記述は大いに問題です。戦後の古代史が、精密に考証を重ね、古代史の史料を渉猟し、「任那日本府」問題とか「高句麗の好大王碑」問題とかを検討し、今では大和朝廷が朝鮮を支配していたのはほとんど史実ではなかろうということが通説になっているわけです。他の教科書は、それを反映しているわけです。大方が疑っていることを、この教科書は断定的に記述している。

レジュメに「初歩的ミスが多く、ほぼ大方の研究によって否定されていることを断定的に書いている」とある後半部分は、主として古代史を想定して言っているわけです。古代

史の叙述はそういうことが多いと言わざるをえない。「大化の改新」も学校で古代史をやれば出てくるには出てきますが、戦後は「大化の改新」の詔に『日本書紀』編纂段階での潤色が認められるようになって、律令制確立の画期として考えられるかどうか論争になっています。したがって教科書でも、律令制との関連では、過度にクローズアップして取り上げることはないはずです。ところが、この教科書では、「君臣の名分を明らか」にしたものとして、大きく取り上げている。戦前の皇国史観ばりの箇所と言えます。

神話も、「史実」ではないことは今日では明白になっています。念のため申しますと、私は個人的には神話を取り上げることには反対ではありません。古代の神話が古代の朝廷の考え方や豪族の世界観を反映していることを必ずしも否定するものではありません。しかしこの教科書ははっきりと白表紙本の段階で「史実を反映している可能性が考えられる」と書いてある。「神武天皇の東征」のところです。こういうことを学界で堂々と言っている人はいないと思います。したがって、明確に歪曲した言い方です。ここには、「史実として神話を入れたいのだ」という意図がはっきりしていると思います。これは神話を取り上げる上では適切な記述方法ではないと思います。

中・近世部分では分量が少ないことは前に申し上げました。この教科書だけの問題ではなく、自国史＝一国史は古代に多くのページをさくこと。この意味では、この教科書は見事にその構図を体現していると思います。中・近世の分量が少ない。世界的にもそういう傾向があることに加えて、この教科書では特にそうならざるをえない理由が二つあるように思います。第一に室町時代、明らかに幕府が明王朝に朝貢していた事実がある。この記述はわずか一行です。しかも「それを嫌って中断した時期があった」とある。中国に朝貢していた事実を隠蔽したいのだと思います。それと全体を通じてはっきりしているのは、この教科書は「天皇中心史観」に立っていると言ってよいと思います。天皇を中心に叙述が進んできて、最後は昭和天皇について、「平和を愛された昭和天皇」というコラムで紹介されて終わる。一貫して天皇中心で叙述する。これも苦笑せざるをえないのですが、そうなると中・近世は少なくならざるをえない。天皇王権を軸に書きにくいからです。ただしそれでも書く。最後に残った記述は「幕府が実力を伸ばしても国家統治の正統性を伸ばすために朝廷をないがしろにできなかったのである」。幕府がいかに朝廷を崇敬したかということを残したわけです。苦しい書き方だと思いますが、「江戸幕府は朝廷を敬いながら、同時に牽制しようと努め」とあります。読みながら書いている人の顔が浮かんでくるような、素直な気持ちが伝わってくる書き方ですね。史料からは「牽制」としてしか読めない。でも「敬おうとした」と書きたい。中・近世部分でそういうことが入っていることを特色として挙げてよかろうと思います。これが分量が少なくなった理由だと思います。

近現代部分は大いに問題になる箇所で、ここが「つくる会」にとっては沢山主張したいことがあった部分だと思います。分量も多い。近現代史部分で 154 ページ。古代史が 62 ページ、中世史 30 ページ、近世史 56 ページ、近代史・現代史合わせて 154 ページあるわけです。現代史も普通の現代史区分と違って、日本史では普通は戦後史を現代史と言っていますが、「世界大戦の時代」から現代史です。これでは「現在も世界大戦の時代」になります。

近代史の特色は、「欧米帝国主義に囲まれて日本の帝国主義化は不可避的だった」という見方が主張されていることです。これははっきり書いてある。「近代日本が置かれた立場」

という項目で「欧米列強に対する恐怖がある。同時に卑屈や屈辱、反発の感情があり、これらを乗り超えようとする努力や工夫などが今日までの日本の歴史を動かす要因となっている」。これは元の文章ですが、最終的にどうなったか。「日本をおそった欧米列強の軍事的脅威は、当時の日本人に恐怖の感情を引きおこした。日本は開国以降、その恐怖を打ち払おうと必死で西洋文明の導入に努めた。そのための努力や工夫などが、今日までの日本の歴史を動かす要因の一つとなっている」と変えられて検定は通ったわけです。元の文章がほとんど残っているわけです。

「日本の帝国主義化は不可避的であった」ということから、当然のことながら、戦争の原因は常に外交関係にあり、日本の戦争は不可避であるということになります。これも随所に書いてあることだと思います。市販本でも「戦争は外交の手段」とはっきり書いてある。のちには一部修正されましたが、それに続けて「政治の延長だった。時には政治上のゲームでさえある。負けれは賠償金を払い、領土を失うが、国民全体が道徳的責任を問われるようなことはない。戦うのは軍人であって、国民すべてが動員されるのではない。このような戦争は限定戦争と呼ばれる。たとえば日清日露戦争は明らかに限定戦争であった」とあった。「庶民もよく戦った」という記述もしばしば出てくる。「平壌一番乗りとされた原田陸士一等卒」「木口小平は死んでもラッパを手から離さなかった」「江戸時代まで武勲とは縁のなかった平民に新しい時代が訪れた」。これは市販本に書いてあることです。

呆れたのは特攻のところです。白表紙本ですが、「米軍の兵はパニックに近い恐れを感じ、後には尊敬の念すら抱いた」とあります。どういう根拠で言っているのか。「故郷の家族を守るため、この日本のために犠牲になることを敢えて厭わなかったのである。アメリカ軍と戦わずして敗北することを当時の日本人は選ばなかったのである」。これは最終的には削除されています。

白表紙本、修正本、市販本の三つを混ぜてお話ししていますが、一緒にきちんと見ながら判断していく必要があると私は思っています。「韓国併合」の箇所は最終的に記述を大きく変えざるをえなかったのですが、最初にははっきりと「イギリス、アメリカ、ロシアの三国がいて、彼らは実際に統治を維持するのは困難である。自己負担を避けたいが、他の二国のどちらかが統治するの困るという地域に対して統治者としての新興国日本の登場は三国にとっては好都合であった。日露戦争後、日本は韓国に韓国総督府を置いて支配権を強め、1910 年、日本は韓国を併合した。これは東アジアを安定させる政策として欧米列強から支持されたものであった」という書き方をして、さすがに変えられています。「韓国併合は日本の安全と満州の権益を防衛するには必要であったが、経済的、政治的にも必ずしも利益をもたらさなかった」。次の箇所は削除されました。「ただ実行された当時としては国際関係の原則に則り合法的に行われた」。市販本ではこの箇所はありません。白表紙本にはあります。

「韓国併合」に関しては確かに記述は変えておりますが、合法的なものであることを主張したいのは明らかだと思います。国際情勢の中では不可避のものであった、と。もう一つ言えば、明らかに問題のある言い方だと思いますが、「朝鮮半島は日本に絶えず突きつけられている凶器となりかねない位置関係にあった」と書いていて、これは削除になりました。朝鮮半島は存在そのものが日本にとっては恐怖なのだと言っているのです。これが前の方に出てくるわけです。隣国との関係を考えた場合、大きな問題がある考え方だと思い

ます。

「南京大虐殺」の叙述部分は巧妙にできていて、「ホロコーストのような種類のものではない」と明確にその存在を否定していたのですが、それを批判されて「南京事件」という言葉で触れています。この記述の前後には「スターリンによる大量処刑」「ナチスによるユダヤ人虐殺」が大きく取り上げられていて、当初は「そういうものではない」と書いてありましたが、最終的にも「もっとひどいことが行われている」という印象を与えるために、こういう配置になっているのだと思います。しかも、前の方の囲みでは、当初は南京では「日本が無抵抗であるのを見て、日本人への襲撃がますます激しくなった」とある。向こうの襲撃が激しかったからだという一文が挿入されていたのです。これは最終的には一部削除されていますが、「南京でおこった外国人襲撃事件」という囲み記事は残っています。また、「日本の勝利がアジアに希望を与えた」という主張は随所に書いてあります。最後まで大体において残っています。市販本に「日露戦争は日本の生き残りをかけた壮大な国民戦争だった。日本はこれに勝利して、自国の安全保障を確立した。近代国家として生まれてまもない有色人種の国日本が、当時世界最大の陸軍大国だった白人帝国ロシアに勝ったことは、世界中の抑圧された民族に、独立への限りない希望を与えた」とあります。

アジア太平洋戦争について、「大東亜戦争」とわざわざ書いていることも目を引きます。ここでも「これは数百年にわたる白人の植民地支配にあえいでいた、現地の人々の協力があってこその勝利だった。この日本の緒戦の勝利は、東南アジアやインドの人々、さらにはアフリカの人々にまで独立への夢と勇気を育んだのである」と言われています。これは元の文章ですが、この文章が市販本でどう変わったか。文部省が「アフリカは言い過ぎである」とアフリカだけ削除した。他の箇所は全部残ったわけです。「東南アジアやインドの多くの人々に独立への夢と勇気を育んだ」。

「大東亜会議とアジア諸国」。大東亜会議とは、戦時中に行われた東条英機首相が大東亜共栄圏の代表を集めた会議です。ここでは「日本軍の勝利で独立への機運が高まった」とありました。文部省はどう変えたか。「（日本軍の勝利が）アジアの人々を勇気づけた」と変えたわけです。また、「日本は欧米諸国が数百年もの間、決して認めなかった独立をビルマ、フィリピン、インド、ベトナム、カンボジア、ラオスの各国に承認した」と書いて「独立のためには戦争が必要だった」と言わんばかりの書き方になっている箇所は、後には削除されました。「60 年の国連総会で植民地独立宣言が決議された。それは大東亜会議の共同宣言と同じ主旨のものであった」。これも削除されましたが、最初はありました。

戦後史は、白表紙本では「戦後の戦争」という表題から始まっていました。一つの大きな戦後観があると考えられる表題です。「日本は戦争に負けたよりも、戦後の戦争に負けたのだ。そのことの方がはるかに深刻である」と、戦後全体を否定したい。これは強い主張として感じました。アメリカの占領によって始まった一連の日本の民主化と言われている時代、平和憲法が制定された時代は、戦後の戦争に破れた結果としてそういうことになった。「戦争に負けたことより、戦後の戦争に負けたことの方がはるかに問題だ」ということが、この教科書の最後の方の大きな主張だと思います。

さて、この他に、この教科書には初歩的なミスが多いことも特色です。教科書としては論外なミスが多い。歴史観の問題以前に、あまりにもお粗末としか言いようがない、極めて初歩的なミスが多い。全部が「勅撰」でもない万葉集が、「朝廷の命によって編集された」

と書かれています。「万葉集は長くその後の模範とされた」ともあります。専門家だったら絶対に書かない。万葉集は江戸時代までは埋もれた歌集でした。日本の歌の模範にされるようになったのは、賀茂真淵以降、あるいは斉藤茂吉以降と言ってもいいのではないでしょうか。コラムに「源頼朝が武家で最初の征夷大将軍に任じられた」とありますが、木曽義仲が武家最初の征夷大将軍です。「１日３食の習慣は室町時代に始まった」という箇所も、現在の通説では江戸中後期だろうと言われている。さらに「富岡製糸場など紡績業」とあります。製糸業と紡績業の区別もできない。「検定をちゃんとせよ」というわけではありません。しかしながら、どこを見ていたのだろうかと思います。こうした初歩的なミスは他の教科書には絶対にないと思います。教科書にあってはならないことだと思います。「２・１ゼネストは 1946 年」とありますが、1947 年です。まさかこんなミスはないだろうと思って読んでいますので、まだあるのではないかと思います。これらはある意味で、直せば済むことです。そこだけ批判したのでは揚げ足とりだと言われても仕方がない。ただ、この教科書は、荒っぽく仕上げたということを、これらのミスがよく物語っていると思います。そして、検定というものも、そんなものだということが分かります。

また、通説で否定されていることを、あえて断定的に書いているとすれば、少なくともその根拠を示すべきだと思います。実は、西尾幹二氏は、正確に論旨をつかんでいるかどうかはともかくとして、さまざまな研究書を読んでいるように感じられます。『国民の歴史』を見ると、都合のいいところは引っ張っている。引っ張られた人は困っているのですが。網野善彦氏の研究とか、近世史では荒野泰典氏という外交史の研究者の説、また自由民権運動に関しても新しい研究を見ている節があります。引用するなら、なぜ古代史にそういうものがないのか。疑問にさえ思います。恣意的な引用であると言わざるをえない。

次に歴史観ですが、この教科書の歴史観は、極めて分かりやすい歴史観だと思います。自国史＝一国史としての教科書の主張や書き方、記述方法は分かりやすい。すっきりしていると思います。まず、既にのべましたが、原始古代から一貫して天皇中心の記述方法です。天皇中心というのは大いに問題を感じるのですが、一貫した日本という主張を行う上で天皇を持ち出すのは、本居宣長以来の論法です。したがって、この教科書だけの問題というより、近代の歴史叙述、自国史の叙述が持っている傾向を極端に出してみせているわけです。天皇中心というところは特にそう思います。現在の教科書叙述ではあまり採用されていない叙述方法です。全体のバランスは古代史と近代史にシフトしていてアンバランスであることは前に述べました。これも近代以降の歴史叙述の特色をよく表している部分です。

自国中心史観は、この教科書だけが持っている傾向ではない。近代以降の歴史叙述は自国史中心的な傾向を持っていることは先にのべました。それにしても、この教科書に問題を感じるのは、対外関係の叙述で、対外関係は全部、力対力、要するにパワーバランスで記述されている点です。一般的には、海外交流とか文化交流に重心を置いて記述されるのが現在の教科書の記述のあり方です。この教科書は力対力、国と国がどういうふうに配置されていて、どこかがグーンと伸びてきたとか、あたかもシミュレーションでパソコンゲームの『三国志』を見ているような、国取り合戦のように見ている。これは一貫していると思います。この見方も、かなり異常なものであると思います。

「かつての日本は常に外国の歴史に理想を求めたりせず、自国の歴史に自信を失わない

確固とした独立心があったが、敗戦後の日本は自分の歩みに突然不安になってきた。どこか自信かなくなっている」というのが、最後の教科書のメッセージです。はっきりした戦後観、この教科書が現在立っている視点をよく表していると部分だと思います。また、国家以外の世界の動向やアジアの民衆はほとんど出てこない。最初、この教科書は「日本史」の本だと思ったんですが、冷静に考えると、中学に「日本史」という教科があったのかなと思いました。中学では「歴史」なんですね。世界の歴史全体を記述しながら、その中に日本の歴史を記述していくのが中学の歴史教科書ですが、これは明らかに日本を中心にして、世界の動向とか、アジアの民衆とか、琉球とか、日本のさまざまな地域の記述がない。「地域を調べよう」と言っている割には、この教科書の中には地域は、ほとんど登場しない。庶民も不在です。女性に至ってはほとんど登場していません。被差別民に対する言及も極端に少ないというのも特色です。

そろそろまとめに入ります。この教科書は非常に問題の多い教科書だということはお分かりいただいたと思います。しかし、強調しておきたいのは、この教科書を免罪するつもりは毛頭ありませんが、教科書問題を考える際、見ておかなければならないのは、一国史＝自国史が元来持ってきた特質という問題です。この特質は、この教科書だけではなく、明治以来、戦後も、いろんな歴史叙述がそういう特質を持ってきた。西尾さんが言うように「これはどこの国でもやっていることだ」と。ひょっとしたらそうなのかもしれません。先程、チェジュ島の先生方と作業を始めたと言いましたが、そこで気づかされたのは、互いの国が自慢話ばかりを記述して、誇りを持っていくような記述の方向をどんどん進めていけば、どこへ向かっていくのか、ということです。これは絶対止めなければならない方向だと思います。しかも、他の日本史の教科書もそういう問題を持っているのです。したがって、「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書だけではない。自国史全体、一国史そのものの記述のありようを見直すところまでいかなければならない。この教科書にだけに攻撃を集中したのでは、そこまでいかない。この教科書は極端にそれを示してくれているわけですが、この教科書を批判することから始めて、互いが自慢話ばかりをするような、異質性・固有性だけを書いていく歴史叙述をストップしていくことが大事だと思います。

歴史にはいろんな歴史観がある。全くその通りだと思います。それに対して二つ言いたいことがあります。まず、多様な歴史観を議論できる教科書を書くべきだということです。歴史教育というのは、ある歴史観を、これが正しい歴史観だということを押しつけるのではなく、いろんな歴史に対する見方を議論していくことが大事なのではないでしょうか。そういう意味で、この教科書は、私たちがめざしているものとは明らかに反対を向いています。

もう一つ、歴史観は自由だから何を書いても許されるか、という問題です。それは歴史叙述にとどまる問題ではなく、社会的意識、世論形成の問題として考えなければならない問題です。たとえば、「戦争大好き」「戦争をどんどんやりましょう」というような書き方。この教科書もそこまでは書いていませんが、そう書きたいのではないかと思わせるような箇所があります。また、明確な人種差別の記述が、この教科書にあるわけではありませんが、微妙なところで言えば、他の国民を冒涜する記述はあると思います。人種差別的記述についてはアメリカではよく問題になります。そのような記述はアメリカでは社会的に許されないわけです。ヨーロッパでは、ナチスを美化する教科書は、世論が許さないわけで

す。そういうレベルの問題が、もう一つ重要なのだと思います。それを教科書だけの問題にしてしまうと、また同じ問題が繰り返されると思います。「歴史観は自由だ」というレベルの問題ではなく、私たち自身が少なくとも、現在の社会的意識として「どういう価値を大切に育てていくか」ということが重要な問題だと思います。その意味では、この教科書はかなり挑発的な記述をしていると思います、ギリギリのところで。

いずれにせよ、自慢話だけで、誇りは作られるものなのか。日本国というものが行ってきたこと、近世の儒者ではありませんが、日本国が犯してきた過ちということはきちんと直視すべきだと思います。「過ちを議論するな」ということだけはやめなければなりません。過ちをきちんと見つめない限り、過ちが繰り返されることは、前近代の歴史家が一貫して教えてくれているところです。歴史の中に得失を見て、鑑としていこうということです。そういう意味では、きちんと歴史と向き合う必要があるだろうと思います。戦後の日本のあり方を、この教科書もある意味で提起しているわけですが、過ちに対してきちんと向き合っていくことが、今後、我々がどういう価値に立っていこうとしているのかに関わる重要な問題だと思います。

最後に教科書検定問題についても触れておきます。教科書に関しては四つの制度があると言われています。国定制、検定制、認可制、自由発行制の四つです。個人的に教科書検定制には反対です。検定制度は廃止すべきだと思っています。世界の国々には、韓国のように国定制を採っている国もあります。しかしながら、大勢としては認可制が多いのではないでしょうか。教科書として認可を与える。採用は自由という制度です。認可制では、教科書としての明確な基準が存在しています。特定の民族や政治、特定の宗教を攻撃しないとか、好戦的イデオロギーを注入しないとか、大雑把な基準ですが、はっきりしています。それに抵触する記述はするなというわけです。人種差別を助長したり、明確に歴史を歪めることも、当然認められません。「周辺近隣諸国を冒涜する記述はするな」ということも、そこに含まれることになります。それをパスした上で、さまざまな歴史観で叙述する。どの教科書を使うかは自由です。個人的には、この方向がいいように思います。ついでに申し上げますと、私は検定制度には反対ですが、この教科書に関しては、検定で落とすべきであったと思います、あまりに初歩的なミスが多いことも含めて。検定がある以上、この教科書は間違って通ったと言わざるをえない。「検定とはそんなものだ」という言い方もできます。だから早くやめてもらいたいということになる。検定をやるなら、こういうものが検定を通ったという責任は、文部科学省と日本政府にある。その議論も逃げるわけにはいかないと思います。いずれにせよ、検定制度そのものを廃止し、さまざまな歴史観で、ただし公正な基準を持って教科書が書かれ、自由に現場の教員が選んでいくことが大切だと思います。教育委員会が一方的に選ぶことを強行しても、結局は教員が選ぶことになるはずです。扶桑社は教育委員会が決めるようにと都道府県議会に請願しましたが、私もそういう動きは警戒していますが、結局は無駄な運動だと思っています。教室をつくっていくのは教員と生徒だからです。危険な教科書が入ってきても、戦後の民主教育を育んできた教育現場はもっと健全な場ではないでしょうか。そこで自らふさわしい教科書が選ばれてくるだろうと思います。それにしても現場教員の教科書選択権は基本的権利だと思います。それを脅かすことは認めがたいことです。そして、歴史観のレベルとは別に、ルールは守るべきだと思います。「つくる会」、扶桑社、サンケイ新聞かやっていることはルール

違反であることは最初に述べました。
　以上、この教科書問題を契機にして、自国史の叙述のあり方、他国の人たちとの関係、他国の歴史との関係まで見通して、自慢話ばかりしあう記述に対して考え方を改めていく必要があるのではないか。そういうことを今後の歴史叙述の流れにしていかないと、このような教科書をめぐる問題は繰り返し出てくるのではないかと思います。
　ご静聴ありがとうございました。
司会　どうもありがとうございました。